

「公共放送ならではの“やさしい”放送の追求」

視 覚に障害のある人は“情報障害者”だと言われる。情報を受け取る（発信する）上で様々な困難を抱えているためだ。

では、普段どうやって情報を入手しているのか。実はインターネットが発達した今日でも、テレビやラジオに頼っている人が多い。

NHKではすべての人に“やさしい”放送を目指している。しかし、本当にNHKの放送は情報障害という“壁”を取り除き視覚に障害のある方にも分かりやすいものになっているのだろうか。

パラリンピック金メダリストで視覚に障害のある井口（旧姓小林）深雪さんに話を聞いた。



井口 深雪 パラリンピック金メダリスト

プロフィール

1973年生まれ。パラリンピック長野大会とトリノ大会のバイアスロンで2つの金メダルを獲得したノルディックスキー選手。視覚に障害がある。“耳で撃つ”射撃の腕前は世界一を誇った。2007年に引退し、現在は主婦。

放送の影響力を実感したパラリンピック

——パラリンピック^{※1}が初めて大々的に取り上げられたのが長野大会^{※2}だったと思いますが、そこでの金メダル。いかがでしたか。

いまでこそ、多くの人に知られるようになりましたが、長野大会が開かれるまでは、マスコミの取材もほとんどありませんでした。だから、冬の競技についてはご存じない方も多かったと思います。

でも、長野大会がNHKも含め大々的に報道されると、期せずして私は「見られる」という立場が変わってしまいました。自分ではやりたいことをやって獲った金メダルでしたから何も変わっていないんですけど、周囲の見る目が全然ちがうんです。

たとえば、電車に友だちと一緒に乗っていると「何人もこっち見てるよ」と。悪気はないんですけど、知らない人から意識して見られるというのは、ちよつと怖いですよ。なかには「あなた知ってるわよ。頑張ったわね」といきなり声をかけて来るおばちゃんなんかもいたりして…。私は心のなかで「知らない。知らない」と言いながら後ずさりしていました（笑）。そのとき、放送つてすごいなあ…。そして、「もう悪いことはできないなあ」と思いました（笑）。

——テレビが見るものだけではなくてしまったわけですね。そうすると、取り上げられ方も意識するようになったのではありませんか。

障害者スポーツ自体が放送されることって、それまではほとんどありませんでしたから、私自身は「どんな枠でも

放送してもらえればいい」という思いでいました。

ただ、福祉の枠でもスポーツの枠でもワイドショーでもなんでもいいんですが、放送されるときには、ルールも含めた競技の中身がきちんと取り上げられているかということとは気にしていました。そこを伝えていただかないと、競技の魅力が視聴者に届かない気がしていたからです。

たとえば、私の競技はバイアスロン^{※3}ですが、あまり馴染みはありませんよね。クロスカントリースキーをして射撃をするということをご存じの方はいらっしゃるかも知れない。でも、「どのくらい走って射撃する」とか、目が見えないのに「どうやって的を撃つ」とか、分からない人がほとんどだと思います。民放は時間の制約もあるんだと思いますが、なかなか詳しくは解説してくれない。でも、NHKはルールもきちんと解説してくれていました。

ルールがきちんと解説されているNHKの放送は本当に役に立ちました。というのも、金メダルを獲った後、講演のお仕事もたくさんいただいたんですけど、番組を見せると、私がルールをあれこれ話すよりも伝わるんです。それを見ると、さらに興味を持って聞いてくださる。本当に助かりました（笑）。

——競技が面白ければ人気も出ますよね。

たとえば、カーリングはすごくマイナーなスポーツだったと思うんですけど、いまでは大人気！（笑）アスリートが美人だったというのもあったかもしれませんが、それ以上に競技自体が面白かったから人気がでたと思うんです。

人気がでるということは、実はアスリートにとつてとても重要なことなんです。少し汚い話かも知れませんが、スポーツは資金力がないと継続していくのは難しいんです。

メジャースポーツはいいですが、マイナースポーツというのはとても厳しい。パラリンピックは様々な形で放送されて、競技としての価値を認められた結果、ようやくスポンサーがつくようになってきています。でも、もつともつと継続的に、たとえば、月ごとに、「今月は〇〇を取り上げます」といった形で放送してもらえると有り難いです。これは、マイナースポーツ全般に言えることだと思います。

海外での情報収集もNHKで

——結婚されて海外で暮らされていたそうですが情報はどのように。

私が住んでいたアメリカ・アイオワ州^{※4}では、なかなか日本の情報を得るのは大変でした。英語が堪能ならもう少し簡単に情報を入手することもできたんですけど、私は英語ができないので（笑）。それで、夫にネットで日本のラジオニュースが聴けるようにセッティングしてもらって情報を得ていました。

ネットでは日本のニュースが結構たくさん放送されていたんですが、そのなかでも私は最終的にはNHKと朝日を選びました。他のも一通り聞いてみたんですが、NHKは放送されている時間も長く情報がコンパクト。とても聴きやすかったのが決め手になりました。

おかげで毎日タイムリーな情報を得ることができ、日本にいる友だちと情報交換をしたり、盛り上がりたりすることができました。いずれは日本に帰る予定でしたから、浦島太郎にならずにすんで良かったです。

※1「パラリンピック」
身体障害者の世界最高峰のスポーツ競技大会。オリンピックと同じ年に同じ場所で開催される。

※2「パラリンピック長野大会」
1998年3月5日、14日にアジアで初めて開催された冬季パラリンピック。5競技34種目で熱戦が繰り広げられ、同大会で廃止されたアイススレッジスピードスケートなどを中心に日本は41のメダルを獲得。

※3「バイアスロン」
クロスカントリースキーと、ライフル射撃を組み合わせた冬の競技。1周5kmコースを3周する間に、2.5kmと5kmの地点で射撃を行う。射程距離は10mに設置され、5つの標的に対し5発の弾を発射する。標的に命中しなかった場合、命中しなかった標的1つにつき1分間のペナルティーが、クロスカントリースキーとの合計タイムに加算される。標的の大きさは、視覚障害者（Bクラス）で直径30cm。視覚障害者の選手は電子音響照準装置を備え付けたエアライフルを使用し、音を使い射撃を行う。

——なぜ、インターネットで情報を得るのに放送という手段を選んだんですか。

インターネットは目が見える人にとってはとても便利なツールだと思っんです。でも、視覚に障害のある私にとって手軽に検索して情報を得られるものではないんですね。たとえば、画面の情報を音声で読み上げるソフトがありますが、サイトによっては余計な情報まで入ってきてしまいます。正直、ちよつとわずらわしい。確かに「こういう情報が欲しいな」って決まっているときに調べるのにインターネットは適しているとは思いますが、日常のニュースをあえて調べてという作業をしたいとは私は思いません。

その点、放送はチャンネルをセットしておきさえすれば情報が供給されます。場合によっては録音することだってできる。聴きながら他のこともできますしね。

視覚障害者にとって必要な情報

——網膜色素変性症^{※5}が悪化し、ほとんど今は見えないとのことですが、テレビやラジオは聴視されていらつしやいますか。

テレビを見ています。ただ、困るのは文字情報が多い。ニュース速報は文字だけなので困つてしまいます。音で注意は喚起しているのですが、肝心の中身が分からない。もつと言葉にして欲しいです。おそらく、本放送とかぶると聞きづらいからということがあるのでしようが、言つてくれないと私たちには分からないですからね。

ほかにも細かくあげればたくさんあります。料理番組で「あとの調味料の量はご覧の通りです…」とか言われても私たちには分からない。ドラマで「携帯を見るシーン」で情感を盛り上げようとしても、私たちからすればストーリー

が分断されているに過ぎません。また、海外の人のインタビューがテロップだけだと完全にお手上げです。

テレビはすぐく視覚に訴える部分が強いのは分かっていますし、ある程度は仕方がないものとは思っています。でも、同じテレビから出てくる情報であっても晴眼者^{※6}と比べれば差が出てしまっんです。ですので、もう少し、視覚障害者を意識して放送を出していただけると有り難いです。

——解説放送は利用されませんか。

使つている方も多いとは思いますが、私はあまり利用していません。というのも、通常放送の音声にかぶつてしまふことがあるんです。特に本放送の言葉の出だしに解説放送がかぶつてしまふと、内容がよく分からなくなつてしまふこともあるんです。だから、私にとっては聞きづらいというか、むしろ、うつとうしい感じですよ。

どういふ風に作られているかは分かりませんが、晴眼者が見るものに少し手を加えてというレベルでは、なかなか、音声のみを情報源としている人にとっては十分なものにならないと思ひます。

ですので、難しいとは思ひますけど、視覚障害者向けのテレビ番組も作つてもらえればと…。たとえばドラマだつたら、好き嫌ひはあると思ひますが、台本みたいなものに書いてあるであろう「動きの細かい部分」なんかは音声表現されていると、より鮮明に想像力を働かせられるような気がしますし、聴く人も増えるような気がします

※4 「アメリカ・アイオワ州」

アメリカ中西部に位置する人口およそ305万人の州。人口が多い州では無いにも関わらず、アメリカ大統領選挙において最も重要な州と捉えられており、候補者が最初に演説する地としても知られている。

※5 「網膜色素変性症」
光を感じる網膜の中の色素上皮に異常な色素が沈着し、光の明るさを感じづる杆体（かんたい）細胞が障害を受ける病気。詳しい原因は不明。

※6 「晴眼者」
視覚に障害のない人。視覚障害者の対義語。

——NHKにこんなサービスがあれば嬉しいというのはありますか。

最近、私は日本点字図書館^{※7}が管理しているサピエ^{※8}というサービスにはまっています。これは、インターネットを介して様々な本の朗読をダウンロードして聞くことができるものなのですが、結構、新刊なんかも早く聞けます。たとえば、村上春樹さんの『1Q84』の3冊目なんかも手に入ります。

朗読は主にボランティアの方々がしてくれていて、その人たちのお陰で私たちは本を楽しめるわけですが、もし、このサービスに、NHKのアナウンサーが参加してもらえれば、さらに充実して本を楽しめるのではないかと個人的には思っています。



トリノパラリンピックでガイドに先導され力走する井口さん（写真提供：X-1）

放送以外のラジ

オサービスの充実も良いかも知れません。たとえば、NHKではNHKオンデマンドでテレビの見逃し視聴はあるようですが、ラジオはありませんよね。もし、そういうサービスがあれば、iPodなんかにもダウンロードして利用す

る視覚障害者もいると思います。そうすればもっとラジオに興味を持ってくれる聴視者もでるんじゃないでしょうか。

最後にアスリートの視点で言えば、障害者向けの新スポーツの紹介番組なんかもあるといいですね。たとえば、視覚障害者の間ではロクククライミングが最近はやっていて、世界選手権もあるんです。でも、やってみたくてもどこまでできるのかという情報は不足しています。ひよっとしたら、地域のコミュニティ紙などには情報があるのかもしれないですが、私たちは読めません。ですので、地域放送のわずかな時間で十分ですので放送時間を割いていただけると嬉しいです。

インタビューを終えて

「情報障害者」と呼ばれる視覚に障害のある方たちは、テレビからの情報に頼っています。その重みは緊急時になればなるほど増しています。しかし、その頼みの綱の情報に対し「もうちょっと何とかならないか」という思いを持っておられるのも事実です。それは私たち作り手が「見える」ために無意識に「情報の壁」を生み出しているのでは、と福祉番組を作ってきた私としては内省せざるを得ませんでした。

公共放送NHKではあまねく放送を届けることを謳っています。であるならば、障害があるために生まれる「情報格差」を伴う放送は極力避けるべきではないでしょうか。「情報格差のない放送」を出すことは、いままで培われてきたテレビの制作の文法にはそぐわないものかも知れませんが、

※7「日本点字図書館」
点字刊行物および視覚障害者用の録音物を利用できる施設。無料または低額な料金で利用できる。平成21年の事業報告によると日本点字図書館の蔵書数は22,244タイトル77,307冊。

※8「サピエ」
さまざまな情報を点字、音声データで提供するネットワーク。パソコンをインターネットにつなげば、24時間いつでも図書を利用することが可能。また、携帯電話・ドコモ「らくらくホン」を使って録音図書を聞くこともできる。

どうすれば、「情報格差」を生まない放送を提供できるかを考える必要があるでしょう。

デジタル時代の到来でたださえ情報が文字に置き換えられることが多くなっているいま、テレビのスイッチの配置を理解するのも困難な人々がいるということも肝に銘じながら番組作り、そして情報の提供に努めていく必要があると改めて感じました。

報告 中央放送渉外部長 竹内 哲哉